
君を待つ

謳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君を待つ

【Nコード】

N6739U

【作者名】

謳

【あらすじ】

逆転裁判3、5話の2カ月後、成歩堂くんが証拠品捏造の疑惑をかけられ、弁護士バッチを手放した直後のおはなし。

久しぶりのBL…。

ちなみに、細かな事情をすっかり忘れておりますので、事実と異なる事を書いている可能性があります。その辺りは、目をつぶれ。

もう暦は夏だというのに、一向に雨が止む気配はなく、皇居の堀周辺を走り回るサラリーマンランナーたちも、近頃は余り見かけない。

この辺りの歩道はいう程広くないので、人通りが少ないのは良い事だと、御剣侍は思っていた。

そう思うのは、虫の居所が良くないからに他ならない。

好からぬ話を聞いたばかりだった。

旧友が、法曹界から追放されたのだ。

海外での仕事をしていたため、知らなかった。詳しく聞けば、もう四ヶ月も前の話だという。

事情を知る共通の知人なら幾らでもいたのに、誰も教えてくれなかった。

気を遣ってくれたのだという思いもあったが、正直、その気遣いは癪に障った。

道を誤りかけていた自分に、法に従事する自らの使命は何かを考える切欠を与えてくれたその友は、あつという間に自分の胸いつぱいに存在感を満たしてきた。そして自分はいつの間にか、それを心の拠り所としていた。

海外に行つて離れ離れになつてもそれは変わらず、珍しい事だが、時折自ら近況を尋ねては、彼の語る日々の平凡な話で心を潤した。

予期せぬトラブルや内圧で荒んだ日も、彼の声で全てを癒し流した。

その彼が、いなくなった。

彼は今、弁護士事務所を芸能事務所と名を変えて、あろう事が養子まで取ったという。

どういう事か。

本人から事情を聞かねば納得の行く事ではなかった。

だから、今、彼の事務所へ向かっている。

雨は強くなる事も弱くなる事もせず、淡々と振っていた。それがまた癩だ。

そんな腹の立つ雨の中を、怜侍は何故かタクシーも止めず、律儀に傘を差して歩いていった。

検察庁舎から件の事務所までは徒歩で行けるが、近い距離ではない。

だが、何故か歩いて行きたかった。

二〇分ほど歩いただろうか。元々歩くのは早いらしいので、常人のペースならば三〇分の道程と言ったところか。

知ってはいたが一度も訪れた事のない、彼の事務所に辿り着いた。

『成歩堂芸能事務所』。

ふざけた名だ。益々癩に障る。

二階まで階段を登り、事務所の扉を開ける。鍵がかかっているかと思っただが、すんなり開いた。

中はしんと静まり返って、蒸し暑かった。雑多に色々なものが散らかっていて、すっかり自宅のようになっていた。

どう声をかけたものかと思ひ、怜侍は暫し立ち尽くした。人がいる気配はないので、帰ろうかとも思っていた。

そんな時、事務所の奥で、ゴトという音がした。

誰かいるのか、と一歩踏み出すと、足音が立った。

「誰ー？」

奥から間の抜けた声が出た。次いで、ひょいと顔を出したのは、

紛れもない、彼・成歩堂龍一だった。

「あれ？ 御剣。」

「あれ？ ではない。」

少しは堪えているかと正直心配していたのに、これだ。無性に腹が立った。

「どついう事だ。」

「どついう事って…？？」

「何故このような事になったかと聞いている。」

どうしても事務的に、威圧的になってしまつ言動に腹を立てつつ、龍一に詰め寄る。

「そう聞かれてもね…。」

龍一はそう言つて、苦笑した。

「証拠品の捏造だつてさ。」

他人事とでも言うようにさらりと言つて、龍一はいつ取り出したのか、手に持っていた缶コーヒーを怜侍に手渡した。

怜侍は缶を受け取ると、それを睨み付けて「お前の意思ではあるまい」と言つた。

「まあ、その辺は、事情は良く解らないけど。」

「解らない、で引いたのか！」

のらりくらりと言う龍一を、我慢の限界を一瞬超えた怜侍が怒鳴り付けた。

「仕方ないじゃない。

提出しちやつたのは自分だし。

まあ、大体目星はついてるんだけど。」

「ならば、然るべき捜査をして…。」

「決定は取り下げないつて。」

「何故だ…！」

「だーかーらー…。」

いい加減面倒臭くなつたのか、龍一が少し声を強めにして、怜侍を指差した。

「出しちやつたのはほくなんだつてば。

誰がどう嵌めたかなんて問題じゃない。確認もせず、それを使つたのは、ほく。」

「わかつた？」と言つて、龍一は指を引つ込めた。

怜侍は納得も出来ず、発する言葉も思い浮かばず、口を噤んだ。

正確には、言いたい事がありすぎて、何から言つべきか、頭が働かなかつた。

そんな伶侍を、龍一はふと笑った。

「なんだ…。何が可笑しい？」

眉間の皺を深めて、伶侍が龍一を睨んだ。

「否、別に。」

ここに来るなんて珍しいと思ったから、何かと思ったら。

心配してくれてたのか、と思つて。」

「な…っ。」

率直に突かれて伶侍が慌てた。幼馴染の冥を素直ではないと批判する割に、自分も十分素直ではない。だからそう、単刀直入に内心を見透かされると、落ち着かない。

あたふたと言い訳を始めようとする伶侍を、龍一が笑った。

「わ、笑うな。」

照れくさくなつて俯くと、一頻り笑い終えた龍一も、俯いた。

「…有難う。」

「？」

怪訝に思つて見上げると、龍一は少し苦しそうな顔をしていた。

「みぬぎがいるから、あんまり考え込まないようにしてたんだけど。

正直、ちよつとだけ堪えてた…。」

「ちよつとだけね」と念を押して、龍一が苦笑した。

なんだ、そうなら早くそう言えばいいのに…。」

「これから、どうするのだ…。」

「ね。」

どうしようか。」

そう言つて笑う龍一の表情は、言葉とは裏腹に、既に何かを見据えているようだった。

そんな彼にかける言葉は、一つしか持ち合わせていない。

「…何か…、出来る事はないか。」

自分でも驚くほど、素直に言葉が出た。龍一も、驚いた。

「御剣にそう言われるとは思わなかった。」

龍一は笑いながらそう言うと、伶侍に大きく一歩歩み寄った。

身長は、龍一のほうが二センチメートル負けている。

だから、ちよつと、見上げる姿勢になる。

対峙するには少し近い距離。理想の距離だ。

「励ましてくれ。」

にやりと笑って龍一が言った。

怜侍は、距離と言葉に「うっ」と言いながら少し身を引いた。が、目の前の龍一は、まるで何かを強請る子供のように瞳を輝かせ、何かを期待していた。

今まで幾度となく争い、憎みながら、見守り、見守られて来た相手。

何度も何度も触れ合つうち、掛け替えのないものになってしまった目の前の相手。

子供のような印象なのに、自分より遥かに大人びて、冷静で。

そんな彼の瞳は、硝子玉の様に綺麗で、優しい。

何もかもを払い除けて来た自分が、ここまでこの男を受け入れるなど、考えも及ばなかった事だ。

その彼は、今、さぞかし心細かろう。

味方はいるが、甘える事もせず、ひたすら自制していたはずだ。

「…。」

怜侍は一思案すると、ふと自嘲気味に笑いながら、龍一の頭上に手を翳した。

そして、セットし難いと愚痴を零していた妙なギザギザ頭を一思いにくしゃくしゃと掻き雑ぜると、たまらずそのまま抱き寄せた。

「待とう。」

お前の道が拓けるまで。」

「…ありがとう。」

(後書き)

え？軽い？

このくらいのニュアンスが好きなんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6739u/>

君を待つ

2011年7月8日03時21分発行